

語彙・意味研究の現状と展望

張元哉*

〈Abstract〉

Current trends and prospects of studies on Japanese lexicon and semantics

This paper overviews the research trends in lexicon/semantics by observing eighteen types of academic journals on Japanese language studies that were published in the past two years (2015 and 2016) in Korea. From these eighteen types of journals, 878 articles relating to Japanese language studies were extracted, 151 of which were on the area of lexicon/semantics.

Researches on the area of lexicon/semantics occupy approximately 17% of all researches of Japanese language studies, which is lower than researches in other areas. However, it was confirmed that the rate has in fact constantly increased and more than doubled compared to the data in previous research. Classification of the 151 articles into subset areas reveals that the largest number of articles were published in the area of "word formation/naming" and "synonym/polyseme", followed by those in the area of "word class/phase". A large portion of articles were on compound verbs in the area of "word formation/naming" and on loanwords in the area of "word class/phase". Many articles in the area of "synonym/polyseme" tend to use corpus and are analysed from diverse perspectives.

Field : Lexicology, Semantics

Keywords : Lexicon, Semantics, Current trend, Compound verb, Synonym, Loanword

1. はじめに

本稿は、この2年間(2015年、2016年)に発行された日本語学関連の韓国の学術専門雑誌における語彙・意味分野の研究動向を概観したものである。学術専門雑誌とは韓国研究財団の搭載学術雑誌と搭載候補学術雑誌であり、調査対象の雑誌はそれぞれ15誌と3誌の合計18誌になる。ただ、2016年の最後の発行号(およそ12月刊行のものがそれにあたる)については、本稿を執筆しはじめた時点(2017年1月10日)までに KISS¹⁾やDBpia²⁾などの学術情報サイトはもちろん当該学会のホームページに論文情報が載っていないものがあつた。『日本語文学』(日本語文学会)の75号、『日本語文学』(韓国日本語文学会)の71号、『日本語文化』(韓国日本言語文化学会)の37号、『翰林日本学』(翰林大学日本学研究所)の29号、『比較日本学』(漢陽大学日本学国際比較研究所)の38号がそれである。つまり本稿の調査対象は、これらの号を除いた18誌の雑誌における語彙・意味分野の研究論文である。語彙・意味分野の研究は、他の研究分野もそ

* 啓明大学校 教授

1) <http://kiss.kstudy.com>

2) <http://www.dbpia.co.kr>

うであるが、文法、社会言語学、日本語教育、日本語史などの複数の分野にまたがるものもたくさんあり、稿者の個人的な興味・関心等によって本調査の対象論文を選定したことを断っておく。

2. 2015・6年の語彙・意味研究の位置づけ

韓国の日本語学における最近の語彙・意味の研究動向を概観するに關して、それ以前の動向と比較して初めて見えてくる特徴もある。しかし、韓国では、日本の『日本語の研究』のように定期的に2年ごとの展望号を掲載する学術専門雑誌が存在しない。したがって、本稿では、その前の2年間の研究動向を比較して、今期の特徴などを言うことはできないかもしれない。ただ、定期的ではないものの展望について述べられた論文はいくつか見られ、ここではそれらの指摘を参照しつつ、今期の語彙・意味研究の全体の大まかな傾向を述べることにする。

韓国における日本語(教育)研究に関する現状については、戦後における韓国の日本語研究から2001年までの大きな傾向を述べた李漢燮(2002)、学会の学術専門雑誌7誌の2001～2002年、2003～2004年、2005～2006年をそれぞれ対象にした李康民(2003、2005、2008)の一連の研究がある。それらに続いて2008～2009年の尹幸舜(2010)、2010～2011年の安平鎬(2012)、また、語彙教育分野の現状を調査した張元哉(2005)がある一方で、特定の学術専門雑誌を対象に過去10年間の研究の流れを観察した俞長玉(2015)と權奇洙(2015)もある。これらの先行研究は、調査対象や調査方法などが異なっており、一概に比較できないが、日本語研究と語彙・意味研究の論文数のおおよその傾向を捉えるための参考とした。本調査の結果とあわせたのが〈表1〉である。

〈表1〉韓国における日本語研究と語彙・意味研究の概要(2001年以降)

文献	調査対象年	日本語研究 論文数	対象雑誌数	1誌あたりの 平均論文数	語彙・意味研究 論文数
李康民(2003)	2001～2002	350	7誌	50.0	29(8.2)
李康民(2005)	2003～2004	500	7誌	71.4	45(9.0)
李康民(2008)	2005～2006	554	7誌	79.1	66(11.9)
尹幸舜(2010)	2008～2009	634	8誌	79.2	119(18.7)
-	-	-	-	-	-
本調査	2015～2016	876	16誌	54.7	151(17.2)
		761	12誌	63.4	-

本調査では、2015～2016年の16誌の学術専門雑誌から日本語・日本語教育研究の論文として876本を抽出し、そのうち語彙・意味分野の論文は151本が得られた。以前の結果と比較してみる。

まず、日本語研究の論文数であるが、この2年間で相当数の論文が生産されているように思われるが、2001年以降の「1誌あたりの平均論文数」を見てみると、約10年前までは増加し続けていたものの、最近は減少を示している。ただ、本調査の場合は、先行調査とは違って、他誌に比べ年間刊行数の少ない(論文数が少ない)大学研究所の雑誌も対象になっているため、それらを除いた12誌にすると、約63%ほどにあがるが、それでも低いと思われる。この現象は、2000年代に入ってから大学および研究者への

評価として論文の数を重視したが、最近になってはそれに対する反省および学会誌への規制の動きの反映だと考えられる。また、韓国での日本関連研究者の採用が好転していない状態が続いており、若手研究者が養成されていないことに合わせて、1世代の日本留学の研究者(1980年代に日本で留学し、博士号を取得して韓国に帰国した研究者)がほぼ退職している時期と重なることもその原因として解釈できる。今後この流れの推移を注意深く見守ることで、その対策などを模索する必要があるだろう。

次に、語彙・意味分野の論文数を見ると、2000年代初めは、8%に過ぎなかった語彙・意味研究は次第に増加し、その後は未調査の期間もあって確かなことは言えないが、2008年以降は約19%まで上昇し、安定した流れを見せる。1960年代から2004年までの韓国の語彙・意味研究の推移³⁾を合わせて考えるとその増加ぶりがより鮮明になるだろう。他にも様々な要因があるだろうが、この語彙・意味研究の増加はコーパスの構築や利用者の増加と無関係ではない。コーパス日本語学の歴史においてその構築が大きく進展した2000年以降が重要な時期であることは改めて述べる必要はないが、張元哉(2014)⁴⁾による、コーパスの活用分野として語彙研究が3番目に多い結果からもコーパスと語彙・意味研究は相性がよいことがわかる。

以上今期の日本語研究と語彙・意味研究についてそれ以前の流れから捉えてみたが、次節からは語彙・意味分野の論文を各カテゴリに分類し、紹介することにする。カテゴリの項目名および分類は、便宜的なものであることを断っておく。

3. 語構成・命名

今期の論文を分析して意外と多くの論考が存在することに気づいたのが、この分野である。前期の分析がないので、今期の特徴とすることができないが、「多義語・類義語」の分野と並んで最も多くの論考が見られる。そのなかでも特に複合動詞の論文が多い。

大谷由香「複合動詞の研究-「動詞+つく」を中心に-」(『日本語文庫』68、2016)、朴敏瑛「現代 日本語의 複合動詞 「~つづける」의 語構成과 意味」(『일본언어문화』35、2016)、白種讚「現代日本語の複合動詞「~ぬく」について」(『일본어교육연구』32、2015)のような日本語一言語を対象にしている論文なども見られるが、韓国での日本語研究の特徴とでも言うべく、李東哲「日・韓・中「N+V」型複合動詞の対照研究-その語構成の異同を中心に-」(『日本学研究』45、2015)、金光成「日本語複合動詞の用法に関する対照言語学的分析-「V+こむ」の事例分析を中心に-」(『日語日文学』66、2015)、金光成「일본어 복합동사와 한국어의 대응관계에 관한 의미론적 고찰-「V+다스」의 사례분석을 중심으로-」(『일어일문학연구』94、2015)のような韓国語との対照研究⁵⁾も多く見られる。日本語の複合動詞は形式・意味ともに韓国語に類似するものが多いが、一方では大きな違いも存在し、そのことが対照言語学や日本語教育の研究テーマとして選択される要因となっていると推測される。先掲の通り、文法化の度合いが高い複合動詞を扱う論文が目立ち、李忠奎の「複合動詞に関する日韓対照研究の現状と課題」(『日本語文庫』65、

3) 張元哉(2005)の調査による。便宜上1980年から5年区切りでデータを示すと次のとおりである。

1980~84: 11本, 1985~89: 17本, 1990~94: 28本, 1995~99: 58本, 2000~2004: 100本

4) 国立国語研究所の『日本語研究・日本語教育文献データベース』からコーパスを活用した論文651本を抽出し、それらの下位分野について調査したものである。

5) 語彙・意味分野の研究151本のうち、対照研究が51本で34%ほどである。尹幸舜(2010)の結果でも、119本のうち46本(約38%)が対照研究である。

2015)と「韓国人から見た日本語の複合動詞-回顧と今後の課題-」(『日本語文學』68、2016)のような複合動詞研究の動向を概観する論考の存在はこうした状況の反映だと言ってよいだろう。

一方、(複合)名詞の造語法や生産性に関する論文(金嘯泳「현대 일본어의 젊은이들의 유행어의 구조와 조어법에 따른 분류」(『일어일문학연구』95、2015)、洪榮珠「복합어의 구조와 생산성에 대한 일한비교연구-N-VN型복합명사를 중심으로-」(『日語日文學』70、2016))や、鄭盛旭「한·일 영화 타이틀의 네이밍에 관한 대조연구-양국의 흥행작을 중심으로-」(『일본연구』38、2015)、空佐知子「日韓ホテル名の等級別特徴比較」(『日語日文學』72、2016)、張相彦「간판명에 나타나는 혼종화에 관하여-수사적 이름 및 일본어계 간판명으로서의 전이를 중심으로-」(『日語日文學』68、2015)のような映画タイトル、ホテル名、看板名の命名とその特徴を論じたものも見られる。

4. 類義語・多義語

この分野に該当論文が多いのは、今期だけのことではないようである。尹幸舜(2010)でも「個別語彙に関する研究が約三分の一を占めている。個別語彙に関する意味分析に重点をおく研究が多」かったとの指摘がある。

コーパスを利用して、日本語の副詞の類義語の違いを文体やジャンルの観点から分析した、趙恩英「「本当に」と「実に」の文体の違いと意味用法について」(『日本文化研究』55、2015)の一連の研究および、姜景完「유의어 분석의 일례-「とりあえず」「いちおう」를 예로-」(『일어일문학연구』98、2016)、全紫蓮「부사의 의미 기능과 텍스트-「もう」와「既に」의 경우-」(『일어일문학연구』96、2016)、金光成「語彙の用法と意味領域の相関に関する一考察:ウェブコーパスとしての『発言小町』の例示を中心に」(『日本語教育』78、2016)などがある。コーパスではないが、アンケートによる場面別の違いについては、中坂富美子・李徳培「類義語の使い分けに関する認識の韓日比較-語種による相違を中心に-」(『日本語文學』66、2015)がある。

コーパスの構築が進み、研究者に浸透してきたことを反映して、類義語の使い分けにコロケーション分析を導入するものが見られるようになった。趙恩淑「コーパスを用いた副詞「なかなか」の共起特性の調査」(『日本語文学』66、2015)、高恩淑「일본어 형용사 유의어의 사전 의미 기술과 공기어 분석을 통한 의미 변별 연구」(『일본어교육연구』35、2016)、徐瑛・李東哲「対訳辞書における語義解釈とコロケーション-中国語の「出現chu-xian」と日本語の「現(わ)れる」を中心に-」(『日語日文学研究』92、2015)、姜景完「연어패턴추출에 의한 유의형용사의 구별-「大きい·強い·深い」의 한정용법을 중심으로-」(『일어일문학연구』92、2015)がそれである。

慣用表現の意味については身体語彙を中心にした、河采伶・鄭秀「관용표현「손을 대다」에 관한 고찰-일본어와의 대조를 통한 의미 분류를 중심으로-」(『일본학연구』45、2015)、森本勝彦「韓国語と日本語の頭部語彙を含む慣用句に関する対照研究-メタファーとメトニミーを中心に-」(『日本文化研究』55、2015)、金炫秀「한일 시각과 관련된 慣用句의 의미 형성의 양상 고찰-[눈/目]과 관련된 慣用句를 중심으로-」(『日語日文學』72、2016)などのいくつかの論考が見られる。

そのほかに認知言語学の観点から分析した論考として、金秀珍「「ウク」と「ウカブ」の意味分析と意味拡張の様相」(『일본어문학』72、2016)、徐順玟「내側への移動を表す「詰める」「満たす」と「채우다」の意味対照-認知言語学の意味拡張の観点から-」(『日語日文學』66、2015)があり、日韓の対訳語お

よび対訳様相を分析した、鄭夏俊「한일번역에서의 ‘多い, 大きい, 高い, 強い’ 연구-신문기사 번역을 중심으로-」(『日本語文學』66, 2015)、梁廷旬「소설 속의 ‘やる類’ 동사의 번역양상-夏目漱石의 『こころ』를 중심으로-」(『일어일문학연구』98, 2016)などがある。

5. 語種・位相(役割語)

語種では外来語に関する研究が多い。まず、ある資料における使用実態の調査としては、權寧成「일본의 초등학교생 국어사전에 등재된 외래어」(『일본어문학』71, 2015)、裴晋影「ビジネス日本語に見られる外来語について」(『日本近代学研究所』49, 2015)、史希英・金順楨「昭和期 演歌에 나타난 外來語 考察」(『일본연구』38, 2015)があり、表記法については李京哲・佐藤亜里沙「日本における外来語表記法の問題点」(『日本近代学研究所』47, 2015)、宋淑正「일제강점기 조선 국어독본의 외래어 표기에 관한 일고찰」(『일본문화학보』64, 2015.2)などがある。

森聡美「韓日両言語における英語動詞の借用に関する対照研究-使用頻度と意味拡張の観点から-」(『日本文化研究』57, 2016.1)、張元哉「한일 양국어의 한자어 및 외래어의 분류와 특징」(『일본어문학』73, 2016)、權景愛「중국어유래 한어오노마토피에 대한 한일양언어에서의 수용과 정착」(『일본연구』64, 2015)などは、外来要素である漢語と外来語が自国語(韓国語・日本語)に定着する過程での意味の変化や特徴の違いについて論じたものである。

位相語についてもコーパスを活用した、吳美善「현대일본 문장어의 「女」 관련어휘 사용실태-「現代日本語書き言葉均衡コーパス」를 분석대상으로」(『일본학연구』45, 2015)や、日本漫画の役割語に対する韓国語への翻訳の実態を考察した、田村友里絵「日本漫画作品の韓国語対訳本に見られる役割語翻訳の実態」(『日本語学研究』43, 2015)、辞書から若者語を抽出して品詞別特徴を述べた、金鎔均・徐慶元「『日本俗語大詞典』に載っている若者語の特徴-品詞別の特徴とその機能を中心に-」(『日本研究』23, 2015)がある。

そのほかに多くはないが、裴株彩・朴志沆「韓日 기초어휘의 語種 대조」(『일본연구』38, 2015)と金施恩「한국인 일본어 상급학습자의 작문 사용어휘 연구-모어화자와의 어종 비교를 중심으로-」(『일본어교육』77, 2016)が、日韓の語種構成を比較したものとして挙げられる。

6. その他

近代以降の漢語を中心とした語彙交流についての研究は、白南徳「『대한학회월보』에 출현하는 일본 한자어 연구-「역술기사」를 대상으로-」(『日語日文學』70, 2016)と、李慈鎬「『韓英字典』의 漢字接尾辭에 관한 연구-일본어와의 교류 관점에서-」(『일본어문학』70, 2015)などがあり、李德培・鄭寶熙「한국 어에 잔존하는 고유 일본어의 사용실태와 인식에 관한 고찰」(『일본어교육』75, 2016)は、現代韓国語に残存している日本語の和語の実態を考察したものである。

日本と韓国における一定範囲の語彙調査や語彙の研究は、崔惠貞「고등학교 일본어 교과서의 어휘-제2차 ~ 2009개정 교육과정의 색인을 중심으로-」(『일본어교육』74, 2015)、李美淑「한 · 일 중학교 국어교과

서의 어휘 분포 대조」(『일본학보』 102, 2015)、金世連「문화소개란의 문화관련 어휘 분석-현행『고등학교 일본어 I』 교과서를 중심으로-」(『일어일문학』 69, 2016)などのように教科書を扱ったものが比較的多かった。

金嘯泳「일본어 텍스트의 가독성 레벨 분석-구舊일본어능력시험 기출문제 데이터에 대한 통계적 검증을 기반으로-」(『일본학보』 103, 2015)は日本語テキストの難易度分析、張元哉「現代日本語と韓国語の語彙におけるカバー率について」(『日本語学研究』 48, 2016)は日韓のカバー率を比較して日本語のカバー率が低いとされた言説を否定している。

7. おわりに

以上で2015年・2016年における語彙・意味分野の大体の傾向を述べたが、論文を紹介する上で、紙幅の都合で近いテーマの研究論文は1本しか取り上げることができず、また、構成上、分類できず紹介を割愛したものも多く存在する。お許しを乞いたい。

韓国における日本語・日本語教育分野の展望号は本誌がはじめての試みであると聞いている。これまで韓国の研究状況として日本の『日本語の研究』などで何度か取り上げられることはあったが、韓国での日本語研究の量的な増加により、今後は一人で日本語学の全分野を詳細に紹介することは困難と思われる。今後も、各分野の研究動向を概観する展望号の定期的な企画を期待する。

【参考文献】

- 權奇洙(2015)「『일어일문학』 개재논문의 주제분석-일본어학분야(1993-2013)를 중심으로」『일어일문학』 대한일어일문학회 67 pp.5-25
- 安平鎬(2012)「海外における日本語研究-アジアを中心に-」『日本語の研究』 8-3 日本語学会 pp.116-119
- 俞長玉(2015)「『日本語文学』의 研究 動向과 展望」『日本語文学』 71 日本어문학회 pp.237-258
- 尹幸舜(2010)「海外における日本語研究」『日本語の研究』 6-3 日本語学会 pp.120-125
- 李康民(2003)「韓國에 있어서의 日本語 研究(2001~2002):專門學術誌의 研究 動向」『日本学報』 55 한국일본학회 pp.117-141
- _____(2005)「韓國에 있어서의 日本語 研究(2003~2004):專門學術誌의 研究 動向」『日本学報』 64 한국일본학회 pp.409-430
- _____(2008)「韓國에 있어서의 日本語 研究(2005~2006):專門學術誌의 研究 動向」『日本学報』 74 한국일본학회 pp.427-450
- 李漢燮(2002)「海外における日本語研究-韓国-」『国語学』 53-4 国語学会 pp.115-123
- 張元哉(2005)「한국에서의 일본어 어휘교육연구의 현황과 과제」『일어일문학연구』 52-1 한국일어일문학회 pp.25-41
- _____(2014)『코퍼스를 활용한 일본어연구와 일본어교육연구』 한국문화사 pp.19-22

〈 요 지 〉

어휘·의미 연구의 현황과 전망

본고는 최근 2년간(2015년, 2016년) 한국에서 발행된 일본어연구 관련 학술잡지 18종을 대상으로 어휘·의미 분야의 연구동향을 개관한 것이다. 학술잡지 18종에서 일본어연구 논문 878편을 추출하고 어휘·의미 분야의 논문으로서는 151편을 얻을 수 있었다.

일본어 연구 전체에서 어휘·의미 분야가 차지하는 비율은 약 17%로 타 분야에 비해 낮은 수치이긴 하지만, 선행조사의 데이터(2001년 이후)와 비교하면 지속적으로 증가하여 2배 이상 정도까지 상승했음을 확인할 수 있다. 151편을 세부 분야로 나누어 논문을 분류한 결과 「어구성·명명」 「유의어·다의어」의 논문이 가장 많았고, 그 다음이 「어종·위상」 분야이었다. 「어구성·명명」은 복합동사가, 「어종·위상」은 외래어를 대상으로 한 논문이 보다 많았으며, 「유의어·다의어」 논문은 코퍼스를 활용하여 다양한 관점에서 분석이 시도되고 있는 경향이 보인다.

논문분야 : 어휘론, 의미론

키워드 : 어휘, 의미, 현황, 복합동사, 유의어, 외래어

■ 장원재 (張元哉)

계명대학교 교수

wonjaec@kmu.ac.kr